CARE World

Vol. 18 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter June 2011

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1 東日本大震災被災者支援
page 2-3 CAREの炊き出し活動アルバム CAREスタッフのある1日
page 4-5 届けこの想い、皆のチカラを集結させて
page 6 CAREストーリー
page 7 スタッフ紹介 私スタイルのCAREライフ
page 8 事務局からの報告 CARE Notice Board

国際協力NGO「CARE」が取り組む 東日本大震災被災者支援

この度の東日本大震災でお亡くなりになられた皆さまとご遺族に対し、心よりお悔やみを申し上げます。また、今なお避難生活を余儀なくされている皆さまにおかれましては、一日も早く通常の生活に戻れることを、切にお祈り申し上げます。

今回の大災害において、「貧困の根絶」を使命に掲げる国際協力NGOである当財団も、人道的観点から発災後直ちに対応を決めました。そしてこれは65年余りの歴史を持つCAREとして、「先進国における被災者支援」に着手する初めてのケースとなりました。世界中のCARE加盟国では、直ちに緊急募金活動が展開されるとともに、すでに多くの専門家が来日しています。

炊き出しの拠点となった小学校の家庭科室のキッチン。大人には少し低い調理台のため、ダンボールを台に大量のにんじんを切るCAREスタッフ。

発災以降、現在に至るまでCAREは、主に岩手県下閉伊郡山田町において、栄養バランスのとれた温かい食事の提供を継続して行っています。今後は、宮古市、大槌町、釜石市ほか同県沿岸部の被災地へと支援を拡大しつつ、これら炊き出しや食糧配布活動に加えて、仮設住宅での生活に必要な物資の配布などを行うとともに、被災者の心のケアにも焦点を当てた活動を複数年に亘り行っていきます。

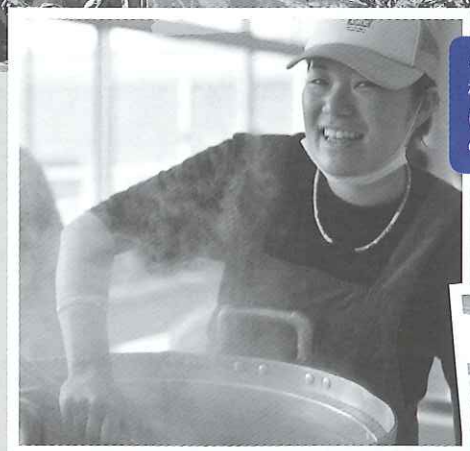
CAREには、第二次世界大戦後の日本において1,000万人を支援した実績があります。そして時を経て、世界中の被災地や紛争地域において昨年1年間で約1千万人もの人々に緊急支援を届けるまでに、その規模を拡大してきました。今まさに、CAREの日本再来と言っても過言ではありません。

当財団は、これまでの経験に裏づけられた知見とグローバルな資源を最大限活かしつつも、一方では被災地・岩手の文化・風習や価値観、そして人間関係などへの配慮を決して怠らずに、一歩一歩確実に支援の歩みを、支援者の皆さまとともに進めていきたいと思います。

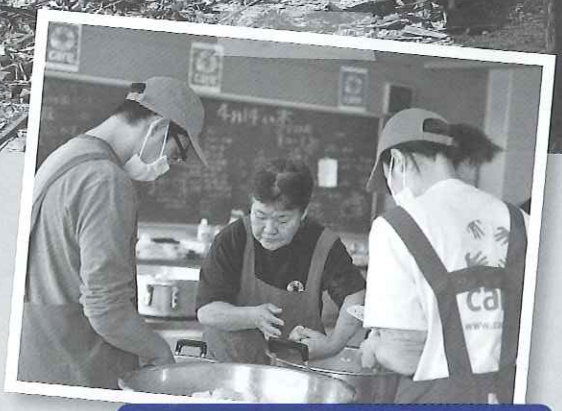
引き続きまして、継続してのご支援をよろしくお願い申し上げます。

緊急支援活動レポート

CAREの炊き出し活動アルバム

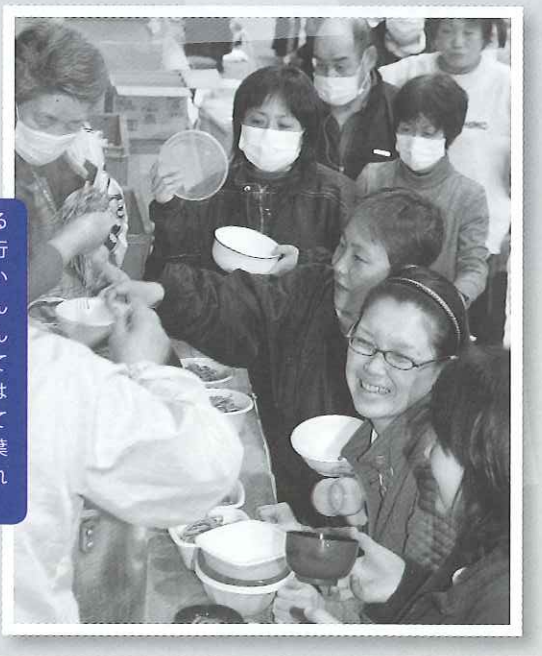


これまで使ったことのない大きな鍋と毎日格闘！完全な力仕事です。でも湯気の向こうには、避難している皆さんの「美味しい！」の笑顔が待っています。



人参やゴボウなど根菜の煮物などの野菜料理を中心に、活力がつくカラアゲや焼肉も登場。栄養バランスを考慮した献立が続きます。時には郷土料理のたら汁で、胃も心も休まります。

朝夕2回の炊き出しでは、毎日1,200人分もの食事を作ります。衛生状況への配慮をしながら、いつも時間との戦いです。こんな時は、料理長の段取りとチームワークで乗り切ります。



配膳は避難している皆さんが自主的に行います。いつもはいち家族のお母さんも、避難所ではみんなのお母さんとして大活躍。配膳の後はきれいに鍋を洗って「ありがとう」の言葉と一緒に返してくれます。

山田南小学校の家庭科室が炊き出し活動の台所！黒板には4月12日のメニューの「五目いなり」の材料や分量が書かれ、小学生用の低い調理台での永遠の皮むきが始まります。

CAREスタッフのある1日

被災地のニーズや被災者の心身の状態などが刻々と変化する中、CAREスタッフは活動が早く軌道に乗るよう管理するとともに、中長期での復興支援に向けて、詳細な活動計画を形成するための現地調査などを日々行っています。

4:00 起床

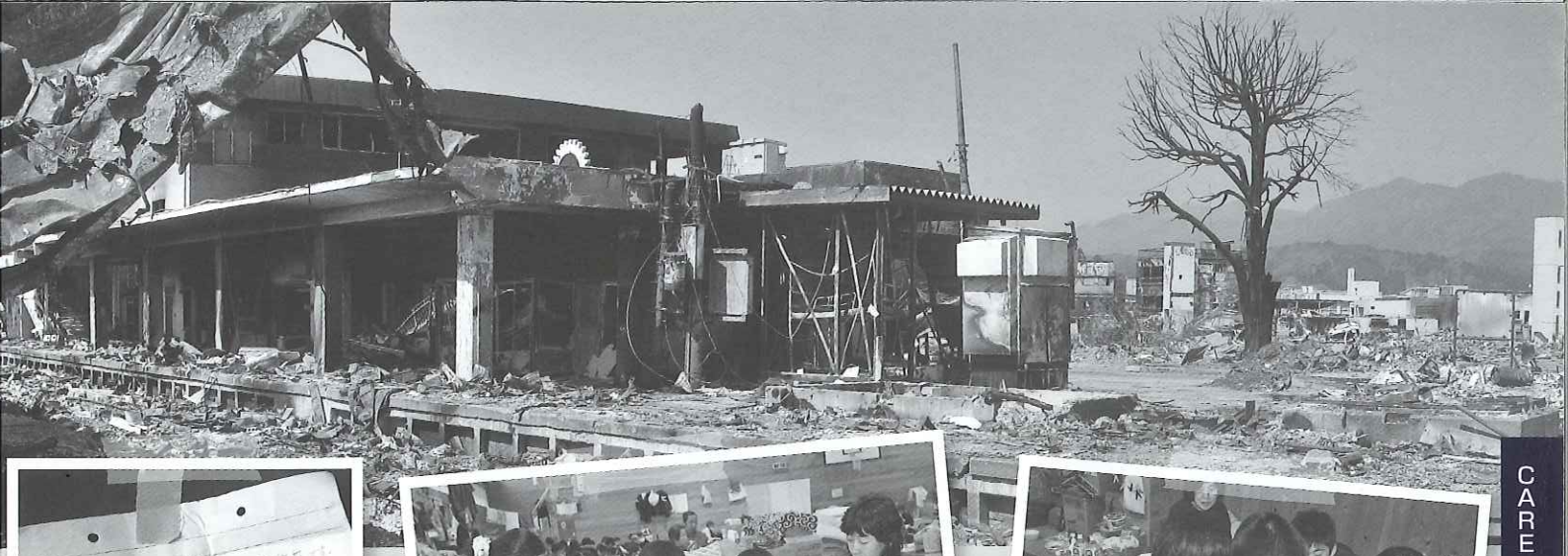
CAREチームの一日はとても早いのです。毎朝避難所で朝食を作る「炊き出し」の調理班と共に起床。

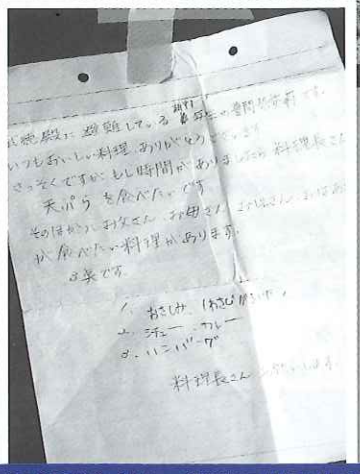
4:30 宿を出発

調理班と共に民宿を出発し、片道約40分の道中、山田港の向こうに映える鮮やかなピンク色の朝焼けを左手に見ながら、炊き出しを行っている山田町立山田南小学校に向かいます。※4月21日より「岩手県立陸中海岸 青少年の家」へ移転

5:15 調理開始

いつも料理長の池田さんが黒板に献立と分量を書いてくれています。スタッフやボランティアはそれを参照しながら、リーダーの指示にしたがい、600人以上の朝食作りに取り掛かります。時間以内に仕上げなければならないため、皆真剣そのものです。





「天ぷらが食べたい」調理場の黒板に貼られた中学1年生から料理長に宛てた手紙。その下には、家族が食べたいメニュー名も添えられていました。

「山田南小学校の炊き出しは美味しくて元気が出る」と徐々に評判に。初めての国内支援を行う名もなき国際NGOの活動は、少しずつ被災した人々の心を開いていきました。

この避難所での炊き出し最終日、スタッフ全員が折り鶴を作りました。でも折鶴の頭は敢えてまっすぐに閉じたまま。そこにはCAREスタッフの復興への祈りと、山田町の人々が自らの力で立ちあがったときにこの鶴を完成させて欲しいという願いがありました。

今日は子どもたちのリクエストに応えて！？ミートソーススパゲッティ。大好きなメニューを前に、思わず笑顔がこぼれます。

山田南小学校の再開にあたり、この避難所での炊き出しが終わりを迎えました。CAREとして山田町での複数年に亘る復興支援継続を誓って、次なる避難所の青少年の家に移動となりました。

7:00 朝食配膳

できあがった食事を避難所グループの代表者に配布します。いつも被災者の皆さまは、お渡ししたお鍋や食器をきれいに洗って返却してくださいます。そのあと、チーム全員でまかないの朝食をとります。ひと働きした後のまかない、これがまたおいしい！

9:00 聞き取り調査

今後の活動計画を立案するにあたり、聞き取り調査に出かけます。今日は、大槌町の吉里吉里地区で、6名が2グループに分かれて、津波被害をぎりぎりで免れたお宅に住む3家族にお話を伺いました。訪問したご家族には妊娠中のお母さんもいらっしゃいました。

15:00 調査まとめと夕食

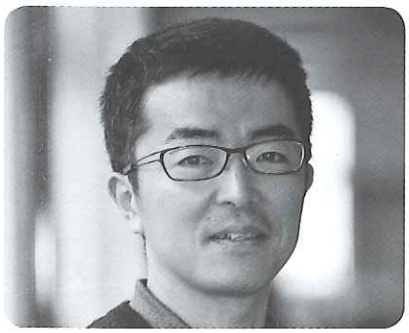
フィールドから炊き出しを行っている避難所へ一旦戻り、そこで他のスタッフと今日の調査のまとめを行います。その後、17:00頃から夕食の配膳準備、片付け、さらには翌日の仕込みなどを行います。

20:00 宿に到着

到着後、CAREスタッフ間で振り返り。その後、報告書などの書類関係をまとめ、東京の事務所へ報告。

24:00 入浴後、就寝。

届けこの想い、皆の



私は岩手県盛岡市出身で、縁あってCAREの被災者支援活動に従事することになりました。主な活動は、ニーズ調査や避難所の方が中心になって作成している地元密着型新聞「くじら山ろく」発行のサポート、ボランティア受け入れの調整などです。時には炊き出し後の洗い物の手伝いをすることもあります。食事の提供については、避難所の方々の栄養状態の改善のみならず、山田町の人々とCAREの信頼関係構築という大きな役割を担っています。地元の方々との信頼関係を大切に考えるCAREだからこそできる活動の展開に期待しつつ、少しでも被災地の皆さんのお役に立てるように頑張りたいです。

（CARE食糧安全事業　フィールドオフィサー　佐藤 真樹）

微力かもしれませんが、皆さまの日々の生活に寄りそうような気持ちでサポートをさせていただきたいと思っています。まだまだ厳しい状況ですが、共に毎日を生きていきましょう。

Dear Colleagues,
I am impressed by the way you are dealing with the disaster, and CARE Germany is happy to assist you in your efforts assisting the people affected by the Tsunami.
All the best Axel Rollaender

CARE
の緊急
をサポ
での緊
ゆるもの
つでした
車も船も
宮古
た精鋭
時間すへ
です。今
に頑張っ
会いまし
いました
これは日
希望でも
（CAREドイ

4月1日の「炊き出し」開始初日から現在に至るまで、強い使命感とご自身の料理人としてのノウハウ・ネットワークを駆使してご協力いただいている調理長の池田さん（右）とその片腕の岩崎さん（左）。毎日栄養を考慮した献立を考え、大人数の食事を時間内に手際よく作るための作業工程を見極めます。そして全スタッフ・ボランティアに作業を分担し、適宜指示を出します。また毎日ミーティングを行い、被災者の皆さまが一日も早く元気になってもらえるよう、食事の献立から配膳方法まで、あらゆる側面からの改善を目指しています。

（CARE炊き出しチーム調理班　料理長　池田 美佐子、調理班スタッフ　岩崎 涼子）

被災者の皆様へ
必ず一歩ずつ皆様に力強く
復興出来ると信じてます!!
池田美佐子

私達がみなさんの力になれる事は
極わずかですが、必ず復興して
元気な町が戻ってくると信じています!
岩崎涼子

以前、
て、第2の
連日流れ
被災地の
担当の任
本の政府
動に関する
ンバー国
ナショナ
ログなど
いに5月からは来日して、被災地から大好きな
（CARE Interna

皆様、☆
自分の目で岩手県での被害を
と話して地元の人々の勇気と
☆ 什っぱれ岩手！イギリス人
ロイス・ロビンソン

小原氏は災害発生5日後の3月16日から、
りまとめ、医療支援を行う諸機関や団体な
所で生活する被災者の食事については、自
階に24時間体制の診療所が設置されたこと
切に自炊をすることが困難になりました。そ
け入れ下さいました。
「様々な支援団体が活動している中、CAR
避難所の方々とも顔見知りです。CAREの支
きると考えています。」

自立なくして復興

チカラを集結させて

で仕事を始めて6年、主には開発途上国で
援に携わっています。今回、日本のCARE
トしたことは、私にとって初めての先進国
支援経験となりました。宮古市は、あら
が普通に見え、とても素敵な日本の町の一
が、海岸沿いに近づくにつれ、港、家、
すべて破壊されており、衝撃を受けました。
務所のCAREチームは、日本中から集まっ
ごろい。驚いたのが、土日関係なく一日24
てを被災者対応のために活動していたこと
はドイツから日本の被災者を支援するため
ています。災害ですべてを失った男性に出
たが、とても積極的に他の被災者を支えて
ここにはそのような人がたくさんいます。
本の人々がすぐに復興できるだろうという
あります。

ツ　緊急支援コーディネーター　Axel Rottlaender)

青森市に2年間住んだ経験のある私にとっ
故郷となった東北。遠くイギリスにいながら、
被害映像を見て、心が痛みました。何か
支援をできればと思っている中、情報管理
に就くことになりました。その内容は、日
対応やメディア情報、そしてCAREの支援活
最新情報などを収集・管理し、CAREのメ
報告するというものです。ケア・インター
ジャパンが作成したニュースリリースやブ
英訳をして、世界中に配信しています。つ
東北の復興に向け、情報発信をしています。

ional UK緊急支援チーム インターン　Lois Robinson)

☆
て、感動しましたが、被災者の方々
の復力がすぐわかりました。
皆様を応援しています！☆

山田町立山田南小学校で3つの避難所をと
の調整を一手に担っています。当初、避難
を検討していた小原さん。しかし、同校1
あり、患者さんたちが往来する環境下で適
な時、CAREの炊き出しの申し出を快く受

のみなさんは継続して支援くださっており、
援活動であれば安心して受け入れることがで

（山田町役場　職員　小原 裕毅氏）

なし
小原裕毅

4月4日～4月17日までの約2週間、岩手県山田南小学校の炊き出しに弊社から6名がボランティアとして参加しました。毎回バラエティに富んだ栄養満点の美味しい食事は、時には避難されている方々のリクエストを反映するなど、みなさんにも笑顔がこぼれていました。食べることは生きることであると同時に、喜びでもあることを改めて実感しました。また、今回の体験で、支援は一方的に与えるものではなく、被災地と一緒に前進する協働作業だということを学びました。山田町の一日も早い復興を願うとともに、今後も様々な形で役に立ちたいと考えております。CAREのスタッフ・関係者の方々に、心より感謝の意を表します。ありがとうございました。

（株式会社イースクエア　コンサルティンググループ　マネジャー　菊地 辰徳氏）

今度は山田町の郷土料理を皆さんと一緒に作って食べたいです！

地震が発生したその翌週の月曜日に、事務局長の武田さんから、被災地支援における車両の協力依頼が届きました。当方の関係会社もネットワークの状況確認に追われる中、㈱日産カーレンタルソリューションズの協力を得て、一台のセレナをレンタカーで確保、被災地域の初期調査にご活用いただきました。初期調査後の4月上旬には、ティーダ4WD車を2台、同様に無償貸与させていただきました。また、被災地復興が長期に亘るとのご判断から、2台の車両をご購入いただき、4/22現在、納車準備を急ピッチで行っております。今後も私たちが皆さんに効果的に協力できることが何なのか、を考えながら、継続的に皆さんのお力になれればと考えています。

（日産自動車株式会社　グローバルコミュニケーション・CSR本部　CSR部　主担 菰田 雄士氏）

自動車という商品が皆さんの生活改善に少しでもお役に立てば幸いです。
みなさんが一日も早く落ち着いた生活を取りもどされますように。
心からお祈り申し上げます。　日産自動車　小暮　　日産 菰田

震災から6日後の3月17日に、都内で、東京から釜石市に届ける緊急支援物資の荷積みボランティアに参加しました。震災被害の甚大さが連日報道される中、何もできないことにもどかしさを感じていた私は、CAREスタッフの方からメーリングリストを通じて「ボランティア募集」の連絡をいただき、少しでもお役に立てればという思いから参加しました。今後の復興に際し、私たちには何ができるのでしょうか。ボランティアや募金といった直接的な貢献活動や、節電などを行うことはもちろん大切です。加えて、被災者の方々を思いやりつつも、各々が日々の暮らしを通して社会経済を動かしていくことが、復興の役に立つのではないかと考えています。

（塾講師　香取 亜紀氏（元マーケティング部インターン））

ひとりひとりが自分にできることを!!

CAREスタッフの元気な姿や声掛けが私たちにもチカラをくれたこと、感謝しています。

これ以上のCARE(ケア)はありません、感謝の一言です。
m(__)m

温かい食事を食べるようになって、避難所の皆が明るく話をするようになりました。

元気な漁師町としてみんなで笑える日がきたら、お父さんの取ってきた魚でCAREのスタッフにご馳走したいです。

CAREの炊き出しのおかげで、安心して食事ができるようになり、心配事が一つ無くなりました。

おいしいごはんありがとうございました。♡
東良美

普段何気に食べていたものがこんなにありがたいものなのだと考えさせられ、涙が出ました。

初めての避難所生活は食べること一つとっても、容易ではないということを思い知らされていたとき、CAREが遠くからやってきて心を癒してくれました。そういう意味でも特別の味がしました。

食べることが生きていく上でとても大事な支援であることが、実際に被災して初めてわかりました。

CAREストーリー

CAREを支えるチカラ
～自らも被災された地元女性教師とともに復興を信じて～

CAREの炊き出しを手伝ってくれている塩井貴子さんは山田町の中学校の先生です。発災時は、授業中でした。

「町はほとんど崩壊し、大半の生徒は、家を流され、そして家族を失いました。中には唯一の肉親を亡くしてしまった生徒もいます。多くの生徒たちは親戚や知り合いの家に引き取られましたが、精神的に病んでしまった子の話も聞きます。中学３年生の担任だったのですが、生徒たちはすでに散り散りとなり、卒業式には全員揃いそうにありません。」と震災直後の状況と生徒たちのその後を気遣いながら話してくれました。

「建物がたくさん建ち並び、活き活きしていた町が一変し、今は冷たい風が吹き抜けるだけの恐ろしく静かな町になってしまいました。でも４年しかこの土地に住んでいない私でさえ、その損失に心を痛めているというのに、ここで生まれ育った人たちの想いは計り知れないと思います。」

塩井さんは、自らも被災したにも関わらず、CAREの活動を知り、「是非手伝わせてください。」と申し出て下さいました。今では中学校も再開したため、平日教鞭をとりながら、週に１度の貴重な休日を利用して、炊き出しをお手伝いして下さっています。

山田町を愛する塩井さんがその復興を強く願う姿にCAREのスタッフも勇気づけられ、以前と同じ賑わいを取り戻した山田町をともに見られる日を信じて、これからも一歩一歩確実に活動を継続していきます。

Hello!

CARE International Japan スタッフ紹介

STAFF

004 事業部緊急・復興支援事業担当 太田　裕子

（写真中央）

現在プログラムコーディネーターとして主に緊急復興支援に携わっています。実はケア・インターナショナルジャパンに入局する前は、緊急支援の経験はほとんどありませんでした。最初に国際協力に関わったのは大学時代のNGOでのアルバイトでしたが、事業地フィリピンの都市貧民街（スラム）で生活する人たちの家を訪問した時、その状況に衝撃を受けました。就職先が既に決まっていたため一旦は就職したものの、自分にできることはないかと考える日々が続き、その結果1年後に現地コーディネーターとして同じNGOに戻ったのが、この分野に再び足を踏み入れるきっかけとなりました。

その後JICAのボランティア調整員としてモルディブに駐在しました。赴任直前にスマトラ島沖地震が発生し、ボランティア事業のとり纏めが本来業務だったものの、復興支援にも関わる機会がありました。その後2007年のソロモン沖地震の後、ニーズ調査のため同じくボランティア調整員としてソロモンに駐在しました。帰国後はJICA本部の青年海外協力隊事務局で国担当として東南アジアの島嶼国を担当しましたが、その頃から緊急支援に関わってみたいという気持ちがあり、国担当の契約が終わる頃、当財団のプログラムコーディネーターの求人に出会いました。

CAREは65年以上の長い歴史と実績があり、支援が必要にもかかわらずその支援が届きにくいところを対象に事業を展開しています。当財団としても、海外事業を20年以上にわたり実施してきましたが、今回の東日本大震災の甚大な被害をうけ、日本国内での支援を初めて行うことになりました。私自身これまで南部スーダンの水と衛生改善事業の東京担当として事業進捗管理やドナーとの連絡調整業務を主に行ってきましたが、今回このような形で、生まれ育った母国の支援に関わることができるのはある意味とても光栄なことだと感じています。

被災地では家、家族、財産など多くを失った方々と接する機会がありますが、想像すると気が遠くなってしまうような困難な状況下、復興に向かって力強く立ち向かおうとしている方々の姿を目にする度に、私にできることは微力だとしても、CAREとして被災地の復興支援の一端を担っていければという気持ちを新たにしています。

私スタイルのCAREライフ

株式会社住友化学（元事業部インターン）
山口　真広

食糧援助対象の村で

現在、株式会社住友化学に勤務し、「経済的、社会的、環境的に脆弱な人々の直面する問題を解決するビジネスモデルを提言するイントラプレナー」を目指し、日々勉強しています。

昨年9月にイギリスの大学院を卒業後、国際協力の主要プレーヤーであるNGOの活動に携わりたく、今年4月の就職までの期間を有益に使い、さらに視野を広げる目的でCAREの事業部インターンに応募しました。

特に印象的な活動は、ガーナ北部の農村にて、延べ6日間、味の素との連携によるBOP(Base of Pyramid:低所得者層)事業に係る基礎調査を実施したことです。青年海外協力隊でエチオピアに駐在した経験と大学院で学んだビジネスと開発の視点を活かし、農村の市場状況、多国籍企業の物流システム、購買力等の情報を収集するため農村の人々を対象にインタビュー調査を行い、貴重な実務経験を得ることができました。また国際協力という共通理念のもと、セクターや援助機関の枠組みを超えた連携することの面白さを実感しました。同時に、ビジネスパーソンの国際協力に取り組む姿勢と情熱を間近で体感することができ、「働くことの楽しみ」を実感できたことは大きな収穫でした。

CAREとの連携でBOP事業を実現するため、ビジネスパーソンとしていち早く成長したいと思います。そして、CAREで培ったネットワークを駆使し、企業間BOPビジネスやJICA・企業・NGO間といった官民連携BOPビジネスの促進にもチャレンジしたいと考えています。

CARE Notice Board

シェフと作る！うんめぇ、いわて！ 「岩手創作料理教室」を開催

4回目を迎える今回の料理教室はCAREが被災者支援事業を実施している岩手をもっと身近に感じていただくとともに、岩手産の食材を美味しく食べることで被災地を支援したい！という思いから企画しました。花巻市出身の古川義明シェフ（銀座アルコ・イリス）ご指導の下、35名の参加者が味覚、感覚、視覚を通して「岩手な空間」を堪能しました。

メニューは古川シェフ自ら家庭用にアレンジしてくださった「岩手県産豚ひき肉のミートソースパスタ」と「岩手野菜のバーニャカウダ添え」の2種の創作料理。シェフ特製の手打ちパスタに絡めていただくミートソースは格別で、今まで食べたことのあるそれとは、ひと味もふた味も異なる豊かな風味と歯ごたえでした。

また会場壁面には現地での活動写真、そして岩手県東京事務所提供の観光案内ビデオが流れる中、スタッフによる現地活動報告も行いました。

食後には参加者全員で、被災された方々への激励メッセージをCAREのロゴが配された横断幕に書き込みました。すでに、CAREスタッフによって被災地に届けられました。

今回参加いただいた皆さんをはじめ、古川シェフ、岩手県東京事務所企業立地観光部藤本副部長と佐藤様、そして地中海レストラン銀座アルコ・イリス様(http://www.ginza-arcoiris.jp/ginza/index.html）にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

古川シェフの楽しいおしゃべりと
料理指導に聞き入る参加者の皆さん

事務局からの報告

宮古事務所開設ならびに事務局移転のお知らせ

この度の「東日本大震災被災者支援事業」実施に伴い、被災地における活動拠点として、岩手県宮古市に当財団の宮古事務所を新しく開設しました。加えて、東京都豊島区雑司が谷の事務局を5月より順次移転し、6月19日をもって以下の住所への移転を完了しました。株式会社秀芽様のご厚意により、震災支援を実施する団体への支援の一環として、1フロア約200㎡の内、150㎡を賃借し、残り50㎡を無償で使用させていただくことになりました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。お近くにお越しの際には、ぜひお立ち寄りください。

（新事務局）〒171-0031　東京都豊島区目白2-2-1 目白カルチャービル5階　TEL：03-5950-1335　FAX：03-5950-1375
（宮古事務所）〒027-0083　岩手県宮古市大通3-4-15　2階

詳しくは、http://www.careintjp.org/をご覧下さい。

"こころ"も"おなか"もいっぱいになろう！

丸紅輸入果実ブランド「富楽宝（ブラボー）」の売上の一部が、CAREの「東日本大震災被災者支援事業」に寄付されます。
4月22日には、合計13,500袋のバナナが、岩手県の山田町・大槌町・宮古市の約26,500人の被災者に届けられました。
お求めは、全国のダイエー・相鉄ローゼン・東武ストア ほかで。　※一部、取扱のない店舗もございます。

丸紅株式会社

ケア・インターナショナル　ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.18
2011年6月30日発行（季刊）
発行人：数原　孝憲
編　集：玉水　輝実

公益財団法人　ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0031
東京都豊島区目白2-2-1 目白カルチャービル5階
TEL：03-5950-1335　FAX：03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

※ 小誌へのご意見、ご感想を募集しています。上記発行元までお寄せください。
※ このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。